

ラブホテルの起源を探る

(株)テイダン 代表取締役 湯本隆信

その騒動が始まったのは、1984年（昭和59年）の夏も終わりかけた初秋だった。

噂には聞いていたが、遂に来るべきものが来た、という感じだ。全国のレジャー・ラブホテルには、軒並みパンフレットが配布され、そこには、「各県警で説明会が開催されるので、所定の場所に参加し、説明を受けるように」、と書かれている。

その物物しさに、ある経営者は「これでこの業界も終わった」と嘆き、落胆の様子は、免れない。全国で開催される県警の説明会には、昨日とは打って変わって、肩を落とした経営者達が、どこの会場も立錫の余地もないほどの集り様だ。県警の担当者という「出す出さないは、皆さん方のご自由です。しかし、規約に書かれている、設備・所定のスペースが作れない場合は、違法となりますので、十分にご注意が必要です」という。一方的とはいえ、「法律で決まったこと」と“ゆずる”状況にはない。さらに、県条例も加わって来る。まさに“踏んだり蹴ったり”の有様だ。

まるで、タカを括ったお役人発言だ。しかし、法改正であり、それに伴う条例改正とあらば、無視することはできない。いかに既得権があるとはいえ、法律は法律だ。ひとたび違法行為が発生すれば、即、逮捕ということになる。侮れることではない。したがって、参集した、ホテル経営者たちは真剣だ。何をやってはいけないのか、何が違法となるのか。まるで、久しく忘れていた勉学の時間となった。

宿泊業に関する、法令の施行・改正は、これまでもたびたび行われてきた。

最初は1948年（昭和23年）の「風俗営業法」の施行であり「旅館業法」の施行だ。前年の47年、いわゆる「パンパンの実態」調査が6大都市で行われた。その数、14,800人と推定されている。この数が、「風俗営業法」・「旅館業法」の施行へとつながっていく。そして、1958年（同33年）の「売春防止法」の施行へと繋がる。当時、

いわゆる「赤線」だが、これは行政が指定し定めたものだ。したがって、違法なものは「青線」となった。この「赤線」には、全国で3万9,000店舗、従業員は12万人を数えた、といわれる。ちなみに都内の「連込み旅館」は、650軒であった。

レジャー・ラブホテルの起源が約400年ほど前の江戸後期であることは、一方で認識はされている。「出会い茶屋」「お手引き茶屋」等がその例だ。

しかし、今日の形態となったのは、戦後のことであり、家屋・室内の変化、さらにいえば、経済の豊かさ、その途上に立ったとき、初めてレジャー・ラブホテルの原型ができたものといえまいか。そうなると、江戸起源説というよりも、レジャー・ラブホテルの本出は、“戦後”ということになるように思える。

戦後、東京大空襲等によって、都内の家屋を失った人々は、約8割に達したという。いわば、飲まず食わずの状況であったが、都心へのリターン率は、凄まじいものがあつた。1945年（同20年）に東京都の人口、約258万人。ところが、約12年後の1957年（同37年）には、850万人まで増加している。戦後すぐの47年には、トヨタ自動車が「トヨペット」を発売している。クルマ社会の到来だ。当時の平均寿命は、男性50歳、女性54歳でもあつた。

後に、レジャー・ラブホテル業界を一斉風靡した亜美伊新氏（「アミー東京デザインルーム」）は、この1945年に生れている。また、全国140店舗という、とてつもないレジャー・ラブホテルを経営していた、故・小山立雄（1925～2011年）は、長野から新宿に移転（自宅は渋谷）し、「建売住宅」業者として、スタートしている。もちろん、1985年（同60年）の「新風営法」以降、設計・デザインで競った、KOGA設計の古賀志雄美氏は、45年には、まだ生まれていなかった。

このレジャー・ラブホテルの設計・デザインの起源は

いつか。それを説くカギが、『人、旅に暮らす』（足立倫行・現代教養文庫）の中でレポートされている。

橋場功雄氏が生まれたのは、1941年。大学中退後、家具メーカーの<ピノキオ>に勤務。この時代、郊外の「モーテル」を知り。28歳で独立<モールドベッド産業>を立ち上げている。

1963年（同39年）に全国の「モーテル」は、約60店舗であったものが、10年後の1973年には、6,000店舗に拡大している。

これらの「モーテル」の多くは、郊外の主要道路から一歩入った、とにかく目立たない、こじんまりした店舗が主流だ（平均、12～13部屋）。国道に面していると出るに出不れない、他人の目も気になる。店舗に入ることよりも、出ることを重視した“出口産業”であった。したがって、土地の用途も、自ずから“調整区域”が圧倒的に多い。実は、この用途が、今日では“価値を損ねる”ことになる。

橋場が立ち上げた<モールドベッド産業>は、いうまでもなく、主体はベッドである。戦後の住環境は、畳の寝床からベッドへ移行中だ。したがって、ベッド中心の寝室。そうなると、ベッド業者としては、ベッド中心の部屋創りとなり、橋場の独壇場となる。そこに現われたベッドは、「京都」「王冠」「御所車」「本御所」等々を部屋の中心に据え、そこから次のデザインへ、壁面・天井へと進む。

ともあれ、設計・デザイナーが、存在しない時代である。1970年（同45年）、全国の「モーテル」数は、3,958店舗となり、埼玉・227店舗、千葉・212店舗、神奈川・203店舗など関東圏を中心に拡大していく。翌年には、対前年約30%増の5,401店舗を数えている。

この業界の流れをみると、400年前の江戸後期から始まったといわれる「出会い茶屋」「お手引き茶屋」「連込み旅館」「円宿旅館」「同伴旅館」「エロ空間（あきま）」等ではなく、戦後直ぐに急拡大した「モーテル」が、そ

の発祥と見るべきであろう。

江戸後期から始まった、レジャー・ラブホテルの源流・原点は、商売の女性達とリンクした宿泊施設であり、その流れは、いわば戦後まで続いていたと理解できようか。1946年（同21年）、GHQの指示によって、<売春廃止。このことによって、「赤線」は生まれた>といわれている。この「赤線」は、やがて「トルコ風呂」――後に、ソーブランドに変更になったのは、現都知事の小池百合子がトルコ人の要請によるものとされている。1984年のことである――。この間、「モーテル」は、1983年には7,256店舗を数えている（警察庁）。

一方、業界の隆盛は、多くの設計・デザイナーを誕生させ、業者も続々と参入してきた。設計・デザインでは、アミー東京デザインルーム、栄建築設計、オオモリ、白壁、西山建築設計、日本エグゼック、マック等々という具合だ。さらにベッドでは、大阪通商、伊和貿易商会、ビケン、クィーンズベッドインターナショナル、そしてモールドベッドだ。

この間、「モーテル」は都心にも進出、とはいえ都心では十分な土地は確保できず、自ずからビル型となり、「ラブホテル」「ファッションホテル」等々の名称が生まれる。いわゆる「新風営法」前年の「モーテル」「ラブホテル」の店舗数は、モーテル・7,001店舗、ラブホテル・4,470店舗（警察庁）であった。

そこに、出現したのが、「新風営法」という名の騒動だ。しかし、戦後の経済・文化・教養等々の進化は、人々に自由を与え、新たな文化をつくる。そこに、恋愛は生まれた。そして、その空間のひとつが、レジャー・ラブホテルであった。そこに、人々は驚愕し、参入したというわけである。

（関係・参考書籍は、本連載最終時に掲載する）